

## 日本ピューリタニズム学会関西研究会

昨年に引き続き、今年も関西研究会を下記の日程で開催します。  
関東の会員の皆さまも、秋の京都に出掛けてみませんか。

日時：2017年10月29日（日） 15：30－17：00（17：30より懇親会）

場所：キャンパスプラザ京都 6F：京都大学演習室

（京都市下京区西洞院通塩小路下る東塩小路町 939）

「京都駅」下車：徒歩5分（京都中央郵便局西側：ビックカメラ向かい側）

報告（15：30－16：30）

坂井純人（神戸改革派神学校）

「ピューリタン革命における長老主義政治理論と自由の概念の神学的基盤—  
スコットランド契約派（カヴェナンター）のキリスト王権論の視点から—」  
質疑応答（16：30－17：00）

司会・コメント：岩井淳（静岡大学）

### <報告要旨>

17世紀の英国ピューリタン革命の最中、ウェストミンスター神学者会議では、聖書の教会政治理論としての長老主義政治が「神定」か、否かを巡って激しい議論がなされた。しかし、それは、単純な定言命法ではなく、「主教派」、「独立派」をも含む「公同性格」を目指す議論であった。事柄が、国教会制度を巡る問題の故、この種の議論は、排他的な印象を与えがちであるが、本来、長老主義政治理論の根底には、キリストのみの統治による、「人の支配からの解放」の希求があった。ピューリタン革命が近世史にもたらした「自由」の概念の根底にある「キリストの王権の支配」の神学的基盤をウェストミンスター神学者会議にスコットランドからのコミッショナーを派遣した契約派（カヴェナンター）の「キリストの仲保者的王権論」から考察する。「キリストの仲保者的王権論」は、神と人間（教会・国家）、個人と共同体、教会と国家の間の仲保者としてのキリストの王権を契約論的に捉えた、スコットランド・カヴェナンターの信仰と歴史的实践の基盤となる主張である。

歴史資料として、1638年の「国民契約」、1643年の「厳粛な同盟と契約」、ウェストミンスター神学者会議における「神定」を巡る議論の議事録、これらに大きな影響を与えた契約派最大の神学者と目される、サミュエル・ラザフォード (*Lex, Rex, A Peaceable and Temperate Plea for Pavls Presbyterie in Scotland*)、ジョージ・ギレスピー (*An Assertion of the Government of the Church of Scotland, in the Points of Ruling Elders, and of the Authority of Presbyteries and Synods*)等の著作から、キリスト王権論の展開に見られる、長老主義、国教会を超えた世界教会への志向、時代の制約における自由と寛容の理解等の射程を再構成することを試みる。これらの議論の背景として、改革派神学のキリスト論、契約論等が、教会と社会の形成理論をも動機付けている点を紹介したい。